

今井昭彦著

# 『近代日本と戦死者祭祀』

東洋書林 二〇〇五年二月三〇日刊

A5判 四三〇頁 六〇〇〇円＋税

西村 明

著者はこれまで数々の論文を発表し、近代日本における戦死者祭祀（慰霊）がもつ特徴についていくつもの重要な論点を提起してきている。本書はそれらの論文を再度整理して、平成一七年九月に総合研究大学院大学日本歴史研究専攻（国立歴史民俗博物館）に提出した博士論文をもとにしたものである。この問題領域の研究において後進の徒である評者にとっては、まさに待望の刊行であった。本書の議論は詳細な状況説明とさまざまな論点をふくんだものであるため安易な要約を許すものではないが、ここでは紙数の関係もあり、大枠に係る部分だけを押さえながら内容を概観し、最後に評者が読後に感じたことをコメントとして記すことにしたい。

序章「研究史と方法・課題」では、戦死者祭祀の研究史の整理と本書の研究手法と課題を提示している。「靖国問題」や戦死者の慰霊についての先行研究が政教分離をめぐるイデオロギ―論争に陥りがちであったのにたいし、著者は森岡清美との共

同調査や、籠谷次郎の研究スタイルを踏襲しながら、「実際に戦死者がどのように祀られたのか、あるいは祀られているのか」という祭祀実態の客観的把握の重要性を強調する。他方で、これまでの研究が総じて対外戦争の戦死者祭祀の問題に偏り、近代日本の戦死者祭祀の出発点であった明治初期の内戦を軽視していると喝破する。そこから、文献調査や聞き取り、面接調査といったこの研究分野で従来から用いられている方法に加え、金石文を資料として重視する本書の研究手法と次のような課題が提示される。すなわち、本書の前半部では明治初期の内戦において、とくに一般に国家による祭祀対象とはならなかった反政府軍戦死者の扱いが地元地域においてどのように展開したのかをまず明らかにし、つづいて後半部では内戦における政府軍戦死者の祭祀を下地として、慰霊制度や慰霊施設の整備が段階的に行われていく対外戦争における戦死者祭祀について、札幌や群馬県などの地域の実態を明らかにするのである。

第一部「内戦における反政府軍戦死者の祭祀」は五つの章からなる。

第一章「会津戊辰戦役における戦死者の埋葬——東軍戦死者を中心に」は、会津鶴ヶ城の攻防戦における東軍（会津軍）の戦死者の遺体がどのように埋葬処理されたのかについて論じている。西軍（新政府軍）については、すでに戦役直後から墓地が整備され、西軍諸藩が墓碑等を建立していたのにたいし、東軍の戦死者は当初「朝敵・賊軍」の汚名の下、西軍当局から埋葬を禁じられて野ざらしとなっていた。その後の交渉の結果、ようやく埋葬許可が下りるがさまざまな制約を課せられていた

## 書評と紹介

という。

しかし、第二章「越後小出戊辰戦役における戦死者祭祀」で扱われる初期会津戦争の段階では、地元僧侶が自発的に行った埋葬許可申請はすぐに受諾され、西軍藩将も埋葬地に参会焼香したという違いが確認されている。その背景として、会津への薩長の憎悪がまだ明確な形をとっておらず戦死者数も少ない初期戦闘であった点や、戦後の管理者の違いなどを指摘している。また、第二章では現代にいたるまでの地元の戦死者祭祀の歴史的展開も詳細に論じている。

一方、第三章「己巳戦役における戦死者の埋葬——東軍戦死者を中心に」では函館戦争（己巳戦役）の事例が紹介されている。ここでもやはり、東軍戦死者の埋葬は禁止されたが、旧幕臣とも親しく東軍に好意的であった有志が断罪を覚悟で埋葬している。西軍の戦死者については、すぐに官軍墓地や招魂社が整備されたのに対し、東軍の埋葬地には木石塔さえ撤去を命じられるなど祭祀が厳しく制限されたが、明治八年には「碧血碑」の建立と招魂祭の実施を契機として東軍戦死者の慰霊活動が公になっている。本章ではまた、現在にいたるその後の経緯を紹介している。

第四章「神風連の乱における戦死者祭祀」と第五章「佐賀の乱における戦死者祭祀」では、明治政府にたいする不平士族の反乱と位置づけられる二つの事例をそれぞれ紹介している。神風連戦死者の埋葬についてはとくに罪人扱いや埋葬の禁止が行われていないという点、その祭祀に関しては、地元では明治十八年以降に幕末の国事殉難者同様の慰霊活動が展開され、昭和

四三年には、熊本県護国神社と靖国神社の祭神としても合祀されることになった点が注目される。他方、佐賀の乱における佐賀軍の祭祀では、昭和二八年段階で佐賀県護国神社の祭神に合祀されている（靖国神社には合祀されない）が、遺族にとっての慰霊施設は、「万部島招魂碑」（明治十年代後半に憂国・征韓両党戦死者の碑が別個に建立され祀られていたものを、大正八年に合わせて改めて建立したもの）であり、その感情が国家による祭祀とは別次元での慰霊形態を生み出したのは当然と指摘している。

第二部「対外戦争における戦死者の祭祀」は四つの章からなる。いずれも護国神社（招魂社）や忠魂碑、忠霊塔などの戦死者慰霊施設の地域的展開を扱ったものである。

第一章「道都札幌における戦死者祭祀——札幌護国神社の創建を中心に」では、札幌護国神社の創建にいたる経緯とその後展開を論じている。同社は西南戦役に出兵した北海道の屯田兵戦死者を祀った屯田兵招魂碑を起源としているが、その碑の移転に伴って日露戦役後に新たに札幌忠魂碑が併設されて千人以上の戦死者が合祀された。そして、大正後期になって札幌招魂社が創立され、昭和十四年に内務大臣指定の札幌護国神社と改称している。敗戦後はGHQの占領政策を受けて札幌彰徳神社となり、昭和三四年に再度札幌護国神社と改称している。本章はそのような複雑な経緯をたどった同社の展開について国家的政策や制度の変遷、全国的な護国神社の動向を視野に入ながら地域的な展開を詳細に論じている。

第二章「群馬県下における戦没者慰霊施設の展開」では、群馬県を事例として、忠魂碑・忠霊塔といった市町村単位の戦没者慰霊施設に焦点をあて、建立時期や現在にまでいたるその後の展開を整理して論じている。ここであえて「戦没者」という表記が用いられているのは、国家祭祀の対象になった戦死者という意味合いにおいてである。そこでは、遺族による個人祭祀から官による共同祭祀へと統合されるにもなっており、それら施設の性格が「慰霊」から「顕彰・護国精神の宣揚」へとその重点を移行させていることを指摘している。

第三章「昭和戦前期における忠霊塔建設について」は、日露戦役後に戦場にのこった遺灰を旅順や大連などに集約して納骨祠に納めたものを起源とし、昭和期に入ってから内地のムラやマチに建立されるようになった忠霊塔の建設の動きを論じたものである。靖国神社を頂点とする神式の祭祀体系の地域的展開の末端に位置づけられる忠魂碑にたいし、遺骨を納める忠霊塔は宗教的には、その祭祀体系から外れるものだが、その建設をめぐるのは「内務省・神社界」と「陸軍省・仏教界」の対立が見られたという。他方、群馬県では昭和十八年・十九年という日本が敗勢に転じた以降に、多くの忠霊塔がムラレベルで建立されているが、その背後には警察署から県知事への建設許可の管轄の移行と、前橋連隊区司令官による建設促進の通達があったという。

第四章「旧藩域における護国神社の創建——群馬県邑楽護国神社の事例から」では、館林藩の招魂祠を起源とする邑楽護国神社の事例を論じている。同社は当初、戊辰戦役で戦死した旧

藩士三九名のみを祭祀対象としていたが、大正後期になって祭神合祀の範囲を拡張し、邑楽郡内の日清・日露戦役の戦死者をも祀ることとなった。さらに昭和に入ると、戦死者祭祀・慰霊活動は次々と新たな展開を見せ、地域に根ざした「地方の靖国」として機能を拡大した。しかし、敗戦後の展開のなかで祭祀が形骸化し、戦死者の無縁化も進行しているという。

終章「結語——「まとめ」と今後の研究に向けて」では、本書全体から明らかになった点を整理している。著者はそこで、一般に内戦における反政府軍戦死者が靖国神社の祭神として国家の祭祀対象とされず、死後の世界においても明確に生前の位置づけが継承されることになったのは近代における新たな価値観（死生観）の創出であると指摘する。「国の論理」により、内戦の西軍戦死者と対外戦争の戦死者は、まず故郷ではなく戦地に埋葬された上で靖国神社に祀られ、地方招魂社の経営と忠魂碑の建設とが、そのような靖国を頂点とする祭祀体系への地方的動員において機能した。そして、日露戦役後の忠魂碑建設の一般化を経て、地域社会における戦死者の共同祭祀という形態が確立し、「慰霊」にとどまらない「顕彰」の意味が付与されることになる。しかし著者は、このような近代日本の戦死者祭祀の特徴を「国の論理」、「霊肉分離」の祭祀としてとらえた上で、「地方の論理」あるいは「地域の論理」や「霊肉一体」的に戦死者を祀る傾向にこそ目を注いでいる。例えば、必ずしも靖国神社の祭神と対応しない地方護国神社の祭神や、納骨の機能をもつ忠霊塔などである。そこに「国の政策」に対峙する民俗や遺族の本音を見ようとしている。

## 書評と紹介

最後に、評者の読後のコメントを若干付しておきたい。

本書は、序章でも触れられていたとおり、招魂碑や忠魂碑、忠霊塔といった金石文を資料として活用している。本書の特色のひとつは豊富な写真資料を掲載し、それを通して読者の理解をうながしているところにあるといえる。このように金石文へ注目することの意味は、著者が指摘するような、近代宗教史研究の盲点をつく斬新さをもたらしているということや、戦死者祭祀の共同的性格に由来しているということにとどまらないだろう。むしろ、著者の研究視角とも密接に関係しているという点を見逃すことはできない。すなわち、著者が注目する反政府軍戦死者や対外戦争戦死者の「地域的」祭祀は、国家的レベルの文字資料に積極的に取りあげられるものではなく、むしろ、「金石文」に託して自らの歴史を語るものであると考えることができる。もちろん、金石文に付随して多くの文字資料も残されており、著者はそれらも活用している。これらの金石文や文字資料は反―正史的な意味合いを帯びており、そういった建碑や祭祀の実践を細かく追跡して記述していく著者の姿勢は、研究のレベルでいえば、多様な歴史の可能性を救い上げようとするものである。靖国神社というものが現在あるような形で生成してくる、ちょうどその背後、あるいはその末端で、実際にどのような動きがあったのかを知ることが、今後の戦死者祭祀（儀礼）のあり方を考える上で重要な視点を提供するものである。

しかし、本書のもつ意味合いはとも研究レベルにだけにとどまらないようにも思われる。とくに反政府軍戦死者の祭祀を

論じた第一部にいえることがだが、著者は各章で取りあげた戦役に関して、たんに戦死者の埋葬や祭祀だけを論じているのではなく、それぞれの戦役にいたる経緯や顛末を、それにかかわった人物描写も含め詳細にかつ明快に記述している。これは著者の意図するところかどうかはわからないが、これはある意味で戦記的記述ともいえ、「平家物語」や「太平記」のような鎮魂の意味合いをも帯びているようにも見える。ともかく、「官軍」的記述からは見えてこない部分に光をあて、事実を丹念に記述していく姿勢も本書の特色として挙げるべきだろう。

それと関連して注意しておきたい点は、そのような戦記的記述を行う際に用いられた資料（金石文も文字資料も含む）の性格について、もう一步踏み込んで言及しておく必要はなかっただろうかということである。つまり、反―正史的、あるいは脱―正史的傾向をもつこれらの資料が生み出される際の、当の資料化の意図（意志）というものについて意識的であるべきではないだろうかということである。どのように反政府軍の戦死者が埋葬されたのか（あるいはされなかったのか）、どのように彼らのために祭祀や建碑が行われたのかという事実をこれらの資料は語っているが、同時にこれらの資料は資料として存在することを通して事実を残すことを（あるいは誤解を恐れずに言えば歴史の「真実」を）訴えてもいるといえるだろう。

J・オースティンの言語行為論の用語を借用すれば、これらの資料は「事実確認的 constative」であるばかりではなく「行為遂行的 performative」でもあるのである。このことはさらに別の視点からいい換えれば、敗軍を物語る（記述する）テク

ストの存在をどのように理解すべきだろうかという問題でもあり、これは第二次大戦後から現在にいたるまで書かれて膨大な量の戦記をどのように考えるべきかという問題ともパラレルなものとして見る事ができよう。

本書を読み進めながら、ほかにもさまざまなことを考えさせられ、また多くの知見を得ることができたが、もはやそれらにコメントを付すための紙数は残されていない。最後に、若干残念に思ったことを述べておこならば、本論部分から導き出される議論の豊富さに比べ、序章・結章での全体の枠組みの整理がやや簡素にすぎるところではないかという印象はぬぐえない。もはや本論で十分議論を尽くしており、それ以上多くを語る必要はないという方針であるのかもしれないが、必ずしも個々の事例に明るくない読者としては、本書の全体像について、著者による誘導をもう少し期待したかったところである。

上田さち子著

# 『修験と念仏——中世信仰世界の实像——』

平凡社 二〇〇五年九月二二日刊

四六判 三一七頁 二八〇〇円＋税

由 谷 裕 哉

本書の著者は、大阪府立大学教授を歴任された中世日本宗教史の研究者であり、本書のベースとなった論考を『ヒストリア』誌などに発表されてきた。共著論文集として、『中世社会の成立と展開』（吉川弘文館、一九七六年）、『鎌倉仏教の諸相』（吉川弘文館、一九九九年）などがあるが、単著はこれが初めてあるという。

書き下ろしの形態をとる本書は三〇〇頁強で分厚い本ではないが、情報量がきわめて多い。中世の民衆宗教史、とくにその宗教意識が主対象であるものの、論ずる範囲が多岐に渡っているのである。一方で文献史学の専攻者ではなく、本書タイトルの片方である修験の研究に些か関わってきたに過ぎない評者には、充分にフォローできない所もあることをあらかじめお断りしたうえで、概略を始めたい。

まず、本書の構成は以下の通りである。

## I 民衆の「神頼み」をふまえた宗教史